

農の持つ福祉力の検証

— 園芸と介護の実態を中心に —

郷原拓男・秋山邦裕*

(農業経営学研究室)

平成19年8月10日 受理

要 約

現在の日本の高齢化を緩和する策として介護保険制度が成立したが、介護費用の問題や、介護難民・在宅医療の問題・介護職員の低賃金問題等が顕在化してきている。そういった点に焦点をあてつつ、「園芸」と「介護」とを有機的に結びつけることで、「園芸」が「介護問題」において果たすことのできる役割について考察を深めるとともに、これまで「園芸」が担ってきた枠組みから一段浮揚することで、「園芸」が高次元のものとして見直される方向性を模索したい。また事例研究を通じて先進的取り組みを紹介した上で、「農」が潜在的にもっている「福祉力」とも呼ぶべき力を「農の福祉力」として有効活用することで、高齢者が住みよい社会と農村活性化の提言へとつなげていき、最後に、高齢者が住みよい社会のありかた、また国が取るべき政策について、自らの考えをまとめたい。

キーワード：介護保険制度、介護、園芸、農の福祉力

Ⅰ. はじめに～日本の高齢化がもたらす問題～

現在日本が直面している大問題のひとつに少子高齢化があげられる。核家族化の進展や労働時間の延長及び、共働きや労働世代の都市流出等、社会構造の変化に伴い、自分の親ですら年老いても介護することができないという社会環境になっている。その結果、老老介護・介護疲れにより引き起こされる介護放棄や介護に伴う自殺・他殺等が報道で頻繁に取り上げられている。また高齢化の進展に伴い要介護高齢者が増加する一方、核家族化の進行等要介護者を支えてきた家族をめぐる状況も変化してきた。そういった事態に対応するため、社会全体で高齢者介護を支える仕組みとして、2000（平成12）年4月に「介護の社会化」を標榜した介護保険制度がスタートした。

同制度がスタートして以来、サービス提供基盤は急速に整備され、在宅サービスを中心に、利用者数がスタート当時の約149万人から、2006（平成18）

年10月には約354万人へと大幅に増加した。介護保険制度は国民の老後の安心を支える仕組みとして徐々に定着してきている。

一方で、サービス利用の大幅な伸びに伴い介護費用も急速に増大し、国庫財政を圧迫しつつある。また、今後我が国は人口減少社会を迎えるとともに、高齢者については、いわゆる団塊の世代が2015（平成27）年に65歳以上となり、その10年後の2025（平成37）年には、高齢者人口がピークを迎えることが見込まれている。加えて、介護難民や在宅医療の問題・介護職員の低賃金問題等が顕在化してきている。

以上のような問題を内包する介護保険制度ではあるが、全国的に介護保険事業所が整備され、多くの高齢者が介護保険制度に依拠している以上、制度の持続可能性を確保しつつ、実効性のある介護予防体制を更に充実していくことが大きな課題である。さらに、これからは認知症高齢者や一人暮らしの高齢者が急速に増加することも予想されており、そういった高齢者が、できる限り住みなれた地域で自立した

*：連絡責任者：秋山邦裕（鹿児島大学農学部 生物生産学科 農業経営学研究室）

Tel：099-285-8623, E-mail：akiyama@agri.kagoshima-u.ac.jp

生活を送ることができる基盤整備をし、「明るく活力ある超高齢社会」を構築していくことが求められている。

本論文では、日本においてより深刻になりつつある介護問題に焦点をあてつつ、緊縮財政・小さな政府を目指す日本において「園芸」と「介護」とを有機的に結びつけることで、「園芸」が「介護問題」において果たすことのできる役割について考察を深めるとともに、これまで「園芸」が担ってきた枠組みから一段浮揚することで、「園芸」が高次元のものとして見直される方向性を模索したい。

その後、事例研究を通じて先進的取り組みを紹介した上で、「農」が潜在的にもっている「福祉力」とも呼ぶべき力を「農の福祉力」として有効活用することで、高齢者が住みよい社会と農村活性化の提言へとつなげていき、最後に、高齢者が住みよい社会のありかた、また国が取るべき政策について、自らの考えをまとめたい。

Ⅱ. 高齢者介護に用いられる園芸療法の展開 ～園芸療法を用いた介護の実践～

1. 「農」が果たす高齢者への効果

日本の少子高齢化がますます進展し、国家財源が枯渇していき、今まで手付かずの聖域であった福祉財源にまでメスが入れられている現状で、その打開策としての役割を「農業・園芸」が担えるのではないかと考えられている。つまり介護と農業とを有機的に結びつけ、補完しあう形で全国的な運動を展開することで、上記のような問題を打開できないだろうかということである。

結論から言うと、「園芸療法を用いた介護の実践」を展開することで、高齢者が土いじりや自然とのかわりを持ち、癒し効果を享受して人生を謳歌しつつ、一方で介護給付の削減を図ることを目指すのである。

言い換えると、身体的に高齢者個々人によって異なる残存能力を保持し、あるいは残存能力の急激な低下を抑えて長寿を全うしてもらう一方で、介護保険にあまり依拠しない形で現在の生活レベルを維持することを目指すのである。その結果、以下のような効果が期待できる。

第一に、植物に接することで五感が刺激され心身が癒される。園芸を通じて植物と触れ合うことで五感を刺激し、心が癒され、心身の状態が改善される。

表1 園芸により期待される感覚効果

視覚	花の色を見ることでカラーセラピーの効果が期待できる。
嗅覚	花の香りを嗅ぐことでアロマセラピー効果が期待できる。
聴覚	風にそよぐ葉音を聞くことで季節を感じることができる。
触覚	土や形のことなる葉に触れると手からの刺激を受ける。
味覚	収穫した果物や野菜を食べることで味覚を刺激する。

資料：黒柳香・北川太一[3]より作成

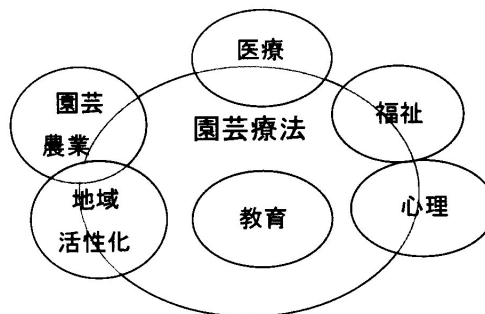


図1 園芸療法と関係領域

資料：淡路景観園芸学校ホームページより抜粋

高価な器具や専門員からの支援を受けることなく、リハビリテーションをすることができる。

第二に、園芸は育てる楽しさを与えてくれる。育てる楽しみは、将来に期待することでもある。種を播けば、発芽が楽しみであり、花や実をつける日が待たれる。

第三に、自然に体を動かすことができる。園芸活動は、楽しみながら行うリハビリテーションとして位置づけることもできる。園芸作業はバラエティーに富むので、それぞれの人の体力に応じた作業を提供できる。

第四に、会話がはずむボランティアは、参加者の会話を引き出すよう心掛ける。これからの作業や利用法について話題がはずむ。

第五に、収穫の楽しみがある。植物を育てると、収穫の楽しみがある。収穫した野菜や果物は味わうことができるし、花や葉はクラフト作りに使うことができる。

2. 農業・園芸が担う地域福祉

農業・園芸を通じて農村をとりまく自然的環境や地域資源の有効利用を期待できる。とりわけ農作業は、「地域」あるいは「地縁」（人と人とのつながり）を抜きにはあり得ない。全国各地で園芸が取り入れられているが、そこでは、利用する高齢者に対する

実施効果もさることながら、活動を支えるスタッフ、さらには地域に対する好影響がみられる。具体的には、スタッフ自身の健康増進効果や、取り組みを通して地元の農業を改めて見つめ直す契機となり、そのことが支援スタッフのグループ化や地域組織の活性化に及ぶことが期待できる。

つまり、要介護高齢者のみならず、そこに関わる人々（機関も含めて）も巻き込んで、活動領域の拡大、ひいては健康で豊かな暮らしの実現や地域社会の活性化に結びつく効果が期待できる。

園芸療法は下記のような地域福祉向上に寄与することができる。

- ① 地域福祉の目的：高齢、障害、その他のさまざまな事情から福祉サービスを必要とするようになって、これまでつくりあげてきた家族、友人、知人との関係を保ち、文化やスポーツ、芸術、趣味などの社会的な活動に参加できることで、誰もが自分らしく、誇りをもって、まちの一員として普通の生活を送ることができるようになることである。
- ② 地域福祉を進めるために大切なこと：在宅での暮らしを支援するいろいろな福祉サービスを整備することに加え、地域の人々の結びつきを深めるために助け合いや交流活動を盛んにすること、道路、公園、商店街などを誰もが利用しやすいものとするなどである。
- ③ 地域福祉の実現に必要なこと：一部の福祉関係の専門機関だけでなく、ボランティア活動やまちづくりに取り組む市民の方々、さまざまな

専門家・団体の方々など、多くの人の協力が必要である。

以上のような地域福祉を整備していくことで、高齢者が安心して生活できるよう地域風土の育成と、土壌形成をしつつ、逆にそのような雰囲気づくりをすることで、高齢者に対し、地域を巻き込んだ介護の質の向上が図られると考える。そして、地域をネットワーク化することで、高齢者をさまざまなポイントから支援することが必要であると考ええる。

Ⅲ. 高齢者介護における園芸療法の実態

～鹿児島県鹿屋市「グループホーム 太陽の家」における事例を中心に～

1. 導入の背景と目的

鹿児島県鹿屋市は、本土最南端へ伸びる大隅半島のほぼ中央に位置し、大隅地域の交通・産業・経済・文化の拠点となっている。人口は106,479人、世帯数は47,527世帯（平成19年10月1日現在）、そのうち高齢者数（65歳以上）は23.97%と非常に高い。鹿屋市では、「高齢者保健福祉計画」を中心とした分野別の基本方針として、「地域で支えあう健やかで心のかようまちづくり」を目指しており、そのなかの具体的方策の一つとして、「園芸療法の推進」が掲げられている。そして以下の2つの施策の実践に励んでいる。

- ① 高齢社会における園芸療法を活用した健康・生きがいづくりの推進
- ② 医療としての園芸療法の確立

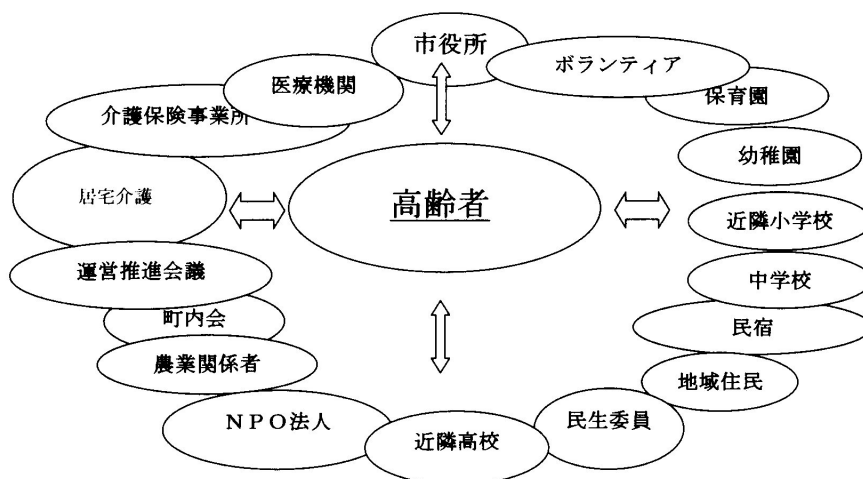


図2 高齢者を取り巻くネットワーク形成（筆者作成）

2. 取り組みの経過と概要

平成12年に、株式会社ケイシンは鹿屋市内において認知症高齢者グループホーム太陽の家（定員9名）を設立した。併設する既存の社会福祉法人敬心会敬心保育園（定員60名）・及び西原台学童育成クラブ（定員40名）との交流を深めることで、保育・介護・福祉の包括的システムを構築するとともに、認知症高齢者グループホームにおいて園芸療法の実践を開始した。さらに、平成16年には隣接して認知症高齢者グループホーム1ユニット（高齢者9名）を増設し、そこには園芸療法が実践できる花壇を設け、また隣接地にあった遊休農地（面積200㎡、植栽種類10種）を整備した。

グループホーム太陽の家（管理者1名・介護職員13名）の園芸療法は、主に3名の介護職員が担当し、グループホーム入居者のご家族、隣接する敬心保育園児童や近隣住民・ボランティアが協力しながら実践している。

実践に際しては、対象者の個人記録（氏名・生年月日・入所年月日・傷病名・病歴・施設利用歴・家族歴・身体状況・生活歴・性格等）を施設から提供してもらい、実践直前の健康状態や心理状況を施設の職員が確認した上で、基本的には対象者：介助者＝1：1で会話を楽しみながら、ゆっくり行っている。

実践はグループホーム内にある観葉植物を用い、差し木、鉢上げ、株分け、寄せ植え、害虫駆除、枯れ花摘み、水やり等を行い、さらに季節の移り変わりを感じていただくため野菜や花の種まき、球根うえ、間引き、芽かき、収穫等を楽しみ、ハーブも数種類栽培し活用している。

その他、押し花、押し花のはがき作り、粘土細工、フラワーアレンジメント、リースづくり、ハーブ石鹸づくり、絵手紙等も取り入れ、快適で楽しい日々の演出に取り組んでいる。

取り組みの発端は平成17年10月、介護職員が中心となり、太陽の家園芸療法研究会の設立であり、次のような活動を行っている。

- ① 家族会・ワークショップの開催
 - ② 研修視察等による知識や技術の習得
 - ③ 園芸療法研究家・実践者等による勉強会
 - ④ グループホーム内外の情報収集・情報提供
- 実践の際には、次のような10条の心得を踏まえて実践している。

- ① 自分が接してほしいように接する。
- ② 一人ひとりを尊重して接する。

- ③ 認知症をもった人ももたない人も平等である。
- ④ あくまでも助手であって、やりすぎではない。
- ⑤ 励ますときには、具体的に励ます。
- ⑥ けがをさせないように気配りをする。
- ⑦ できないことに目を向けず、できること、すばらしいことを引き出す。
- ⑧ 小さいことでもほめる。
- ⑨ 園芸療法はみんなで楽しむものである。
- ⑩ プライバシーについては、他言しない。

表2 施設等における実践の詳細

目的	対象施設	実践日	対象者
健康と生きがいづくり	グループホーム太陽の家	週1回2時間	入所者
世代間交流	敬心保育園	月1回1時間	入居者・児童
	西原台学童育成クラブ	月1回1時間	学童

資料：聞き取り調査をもとに作成

3. 実践の効果について

グループホーム太陽の家における園芸療法の目標は「鹿屋市高齢者保健福祉計画」にあるとおり「園芸療法を活用した健康・生きがい作り」である。目標の設定は、対象者の心身等の状況を把握し、現在の状態を改善するために行うものである。鹿屋市では、個別には目標を設定せず対象者全員に対し次のようなことに留意して実践し、データを個々に記録し経過を観察している。

- ① 対象者の個々の残存機能を考慮し、能力や作業の速度にあわせて楽しく実践し、満足していた。
- ② 次回もやってみようという意欲を引き出すとともに、少しでも長時間継続して実践していた。
- ③ いつもの生活空間とは異なる植物や小鳥に囲まれた空間で、リラックス・リフレッシュしていただく。
- ④ 基本的に対象者：介助者＝1：1の実践による会話により自己表現を促すとともに、参加者同士がコミュニケーションを図るように導く。
- ⑤ 集中して実践し、達成感を味わっていただくようにする。

《事例その1》

グループホーム太陽の家入居者 Sさん

年 齢：76歳

傷病名：脳出血による左片麻痺・言語障害・車椅子使用・要介護4

週1回実践を開始。言語障害・片麻痺であることから次のことに主眼をおいて実践。

- ① 共同作業によりコミュニケーションを図る
- ② 季節感を感じる。
- ③ 腕と手指の機能訓練

農業を生業とされており、趣味として盆栽や庭づくりを行っていた経緯があり、殆どの作業は口頭指示で理解することができた。話題に引き込めば、反応が返ってくるが、ややもすると無表情になる。麻痺側の腕や手も園芸作業にて使うようにした。

半年過ぎるころから、冗談を言ったり、鼻歌を歌ったり、介助者との作業と会話を楽しみ笑顔が見られるようになった。作業を工夫したり積極的に集中して行うようになり、前回の作業も記憶していた。

今年で3年目を経過し現在に至るまで、週1回のペースで実践を継続しているが、体調が悪くない限り実践を楽しみにしており、実践を拒否した事はない。もはや生活の一部となっている。言語がやや不明瞭になり、嚥下や咀嚼機能ならびに筋力の低下は否めないが、自分から会話をしたり、他の参加者と話をされている。作業に対する集中力、積極性は継続している。

Sさんは入・通所者同士、また、ボランティアや研修にきた方、児童・生徒など人と話をされることが大好きである。実践をしながら、多くの方々とのコミュニケーションを楽しみ、発語を促すとともに生きがいにもつながっている。

今後も、Sさんと一緒にスタッフ・ボランティアも楽しみながらより長く実践を継続していくとのことだ。

《事例その2》

グループホーム太陽の家入居者 Aさん

年 齢：76歳

傷病名：脳血栓左不全片麻痺・白内障のため強度の視力障害・要介護2

Aさんに対しては、皆さんと楽しく過ごし満足して帰っていただき、実践したことについてご自宅で

コミュニケーションの手段として活かすことに主眼を置いた。

Aさんは、趣味で野菜や花などを栽培していた。強度の視力障害であるが口頭指示で作業ができる。土に直接触れることは好まず、自分でゴム手袋を持参して作業をしている。なるべく、麻痺側も作業の際活用するように心がけている。週2回のペースで実践し、参加者がほとんど毎回同じ方々のため気心も知れており、作業しながら他の方の話を聞いて、楽しそうに会話に加わっている。植物は大好きで、本当は自宅でも栽培したいようだが、家族の負担を考慮施設での作業を心待ちにし、積極的に参加している。施設での収穫物を持って帰って味わったりすることで、より自分の存在理由を見出すことができる。

Aさんは強度の視力障害にもかかわらず意欲的に園芸を実践されていること、参加者同士のコミュニケーションがうまく取れていて楽しくリラックスして過ごされていること、植物の成長や収穫物をとてにも楽しみにされていることなど、園芸療法の実践が生活に張りを持たせている。今後も意欲が低下しないよう見守り、知識や経験を発揮し、自尊心を保ちながら作業を継続していく方向で考えているということだ。

4. 今後の課題

①効果の実証

園芸療法の効果や価値が納得できるデータとして計量化されることは、園芸療法が広く認識されるため必要不可欠である。グループホーム太陽の家においては、実践後おもにその方のコミュニケーションの様子、作業の様子のほか、実践中、また実践後確かに本人にとってよかったと感じられる点などを記録している。

しかし、その経過を記録し、実践していない時と比べどうであったかを記録するまでには至っていない。対象者・一人ひとりの症状、能力・性格・心理状況・環境が異なる上、記録者の主観や力量に左右されるため、スタッフの力だけでは誰にでも当てはまり、納得できるデータにまとめあげるのは難しい問題であるからだ。

現時点において計量化する方法としては、専門職・専門機関・研究機関によりすでに確立されている計量方法に当てはめて測定する方法が考えられる。

ただし、計量化したとしても人間の感情や心理状況は一人ひとり違うので、あくまでも一事例として

あるいはスタンダードとしての計量化であって、絶対的な基準にはなりえないと考える。

しかし、園芸療法に取り組む者にとって、園芸療法の効果を測定する計量化については、園芸療法の持続的利用を図るにあたって最大の課題であると考ええる。

②定着・普及・人材育成

上記のための手段として、現在グループホーム太陽の家では、次のことを行っている。

i) 園芸療法ワークショップ

鹿屋市内にある35ヶ所のグループホームが加盟するグループホーム連絡協議会に、園芸療法の有効性を提案することで、介護における園芸療法の実践を促している。将来はさまざまなテーマで最新の情報や知識、技術等を研修する予定である。

ii) 情報交換・交流

近年、園芸療法を実践する施設や研究会が設立されさまざまな活動が展開されている。実践施設や研究会と情報交換をし、研修をすることで、知識・技術の習得を目指している。

IV. おわりに～今私にできること～

日本農業は現在さまざまな問題に直面している。その多様な危機の解決の一方策として、農業・介護を有機的に結びつけ、それを「園芸療法を用いた介護の実践」運動として展開することで、国庫圧迫解消の打開策および農業の意義付けの見直しにつながるのではないかと考えた。また一方で、介護の分野においても、医療費や介護費用の増加に伴い介護保険自体の存続が危惧される局面に陥っている。ますます進行する高齢化のうねりの中で、医療保険制度改革と介護保険制度の見直しが急ピッチで進められている。そういった状況下で、園芸や農業を通じて生き

生きとした生活を高齢者の方に送ってもらうことができるのではないかと考え、本論分の作成に至った。

農業と介護という一見関係性の薄い分野において接点を見出すことはなかなか難しく、有機的に結びつける事自体が本来無理な話なのかもしれない。ましてや率先して実践するリーダーが不在であれば、運動の展開は実現困難かもしれない。しかしながら事例で見たとおり、現在園芸療法への取り組みは局地的に実践されており、全国的な広がりを見せつつある状況である。この流れを持続的に維持し、計量的に効果が実証されれば、将来の介護における主流となることもあり得るだろう。現在小さな火かもしれないが炬火となる事を夢見つつ、園芸療法の実践という小さな一歩を踏み出し続けたいと考える。

参 考 文 献

- [1] 松尾英輔「農耕・農村の福祉力～園芸療法・園芸福祉の可能性を探る～」『農業と経済』第66巻第1号（2001年1月）
- [2] 北川太一「今、なぜ、農の福祉力か」『農業と経済』第69巻第13号（2004年3月）
- [3] 黒柳香・北川太一「農地を活用した高齢者福祉活動の成立条件に関する研究－島根県出雲市『生きがい対応型デイサービス園芸療法プログラム』を事例として－」『農林業問題研究』第37巻第4号（2002年3月）
- [4] 藤岡幹恭・小泉貞彦『農業と食料がわかる事典』（日本実業出版社、2004年）
- [5] 松尾英輔『社会園芸学のすすめ～環境・教育・福祉・まちづくり～』（農山漁村文化協会、2005年）
- [6] 奥山正司「介護保険制度下における農村の高齢者介護～主に東北農村の事例を通して」『現代法学』第9号（2005年3月）
- [7] 厚生労働省『厚生労働白書（平成19年版）』（ぎょうせい、2007年）
- [8] 鹿屋市ホームページ（<http://www.e-kanoya.net/>）
- [9] 淡路景観園芸学校ホームページ（<http://www.awaji.ac.jp/>）

Focusing on the Inspection of the Welfare Power of Agriculture
— Gardening and the Nursing —

Takuo GOHARA and Kunihiro AKIYAMA^{*}
(*Laboratory of Farm Management*)

Summary

Nursing-care insurance system was formed as the plan which eases the present Japanese aging, but problems of a nursing cost, nursing victims, problems of medical treatment at home and problems of low wages of nursing staffs, etc. are clarifying. “Gardening” is to tie “gardening” and “nursing” organically and deepens consideration about the role “gardening” can achieve in “nursing problem”.

By introducing advanced actions through a case study, I want to consider the “the welfare power of agriculture”.

Key words : Nursing care insurance system, Nursing, Gardening, The welfare power of agriculture

^{*}: Correspondence to: Kunihiro AKIYAMA (Laboratory of Farm Management)

Tel: 099-285-8623, E-mail: akiyama@agri.kagoshima-u.ac.jp